

經濟論叢

第122卷 第1・2号

哀 辞

故小島昌太郎名誉教授遺影および略歴

The Oriental Bank Corporation, 1851-84年(下)

- | | | |
|---------------------------------------|---------|-----|
| | 本 山 美 彦 | 1 |
| ドイツ第二帝制における1879年の政策転換に
関する一研究..... | 野 田 敬 一 | 23 |
| 労働者の生活時間構造と余暇..... | 福 島 利 夫 | 45 |
| 資本主義社会における老人の生存権について..... | 小 川 和 憲 | 68 |
| ゴエルロ計画の方法と発表後の経過..... | 中 江 幸 雄 | 86 |
| 追 憶 文 | | |
| 小島昌太郎先生を憶う..... | 堀 江 保 藏 | 111 |
| 小島昌太郎先生を偲ぶ..... | 中 谷 實 | 114 |
-

昭和53年7・8月

京 都 大 学 經 濟 學 會

小島昌太郎先生を偲ぶ

中 谷 實

昭和五十三年六月十一日、京都大学名誉教授小島昌太郎先生は、九十年五ヶ月の生涯を閉じられた。私が京都帝国大学の学生として先生の講筵に列したのは、先生が経済学部教授に任ぜられた早々の頃で、年齢四十に満たぬ少壮気鋭の時代であった。風貌温和な紳士であったが、燃えさがる学問への情熱は、聴講学生を魅了し、私自身もこれに引かれて先生の演習に参加を願い出たのである。

先生の学問を論ずることは僭越の極みであるが、先生は学問の世界において、未開の分野に新しい学問体系を築き上げてゆくという面で、素晴らしい才能をっておられたように思えるのである。先生の専門は保険・海運の領域から始まっているが、わが国で、一つの学問体系としての保険論や海運論が確立し、単なる技術論からの脱皮に成功したのは、小島先生の業績に俟つところが極めて大きいと思われる。先生はよく、講義

の合間に、学問の性質を論ぜられ、Wissenschaft, Lehre および Kunde について話されたが、それは、保険論や海運論を研究せられる過程で、つねにその学問的性格を意識しておられたためではなかろうかと考えられる。また当時、経済学に属する各分野で、それぞれが連繋もなく独立して研究されてきた従来の傾向にたいして、強い反省が現われ、すべての分科学は、そのルーツに遡って、そこから基礎的経済理論との関連を失わずに研究を進めるべきだ、という声が高くなった。「〇〇の旗の下に」というような運動が、経済学の世界にも現われてきたのである。そして小島先生の保険論や海運論は、逸早くこの傾向を採り入れて大成せられたものといえるだろう。

先生はさらに、講義の中でも「何でも屋のコーラー」を引合いに出されることが屢々あったが、それは、何でも彼でも手当たり次第に本を読み、手当たり次第に色々な研究に着手することを奨められたのではない。一つの目標に向かって研究を進めてゆくうちに、何らか一つの問題を究明しなくては、その後の研究を継続できないような場合があり、この問題を究明してゆくうちに、他の研究領域に足をふみ入れていることが多いことを述べられたのである。先生自身も、保険の社会経済的な本質が金融機関たることから、社会における資金循環の仕組みに興味をもたれ、金融論とくに金融の流通経済的把握に憂き身をやつされるようになった。私が先生のもとで、もっとも多く教えをうけ、また無礼に批判がましい暴言を吐いたのもこの頃である。大著「金融論」を御執筆の頃は、先生もすでに老域に入りかけられ、無理なお仕事はお案じ申していたのであるが、そのお仕事ぶりを拝見して、壮年時、保険本質論や海運同盟論を御執筆の時は、如何ばかり激しい情熱を傾けられたかとお察し申した次第である。さらにまた、先生は、経済学の領域から経営学にまで研究領域を拡げられ、その研究室から発刊された『経営と経済』は、わが国における経営学勃興の時運に乗って、斯学の興隆に貢献し、多くの優れた学徒を養成せられたのである。

学者としての小島先生については、到底ここに書き尽せるものではない。広般にして深遠なその学識もさることながら、先生の鋭い洞察力と新しい智識体系を組立てる点での素晴らしい才能とは、こんにちの経済学界においてもっとも渴望せられるもの一つではなかろうか。いうまでもなく、こんにちの世界には、已成の経済理論では到底説明し切れない現象が多い。たとえば不況に沈み行きながら物価が高く上昇してゆくスタグフレーションの過程など、経済以外の原因に藉口して、経済学の責任を免れたと考えるものはいないだろう。もしも小島先生に見られたような頭脳と才能とが、こんにちの経済学界に活躍したならばと想像するとき、先生の御逝去は返すがえすも残念である。

小島先生はまた、その才能とお人柄との故に、数多くの優れた弟子たちに恵まれられ

た。京都大学での後継者だった佐波宣平教授をはじめ、保険・海運・航空等のほか金融・経営等先生の全学問領域に亘って、有数の学徒が根を張り枝葉をのばしていた。その人脈はまことに壮麗をきわめたものである。ところが、その優秀な後継者のうちかなりの数に上る人達が、已に早く黄泉の客となられていたことは、晩年の小島先生にとって唯一つの淋しいことでなかったろうか。弟子達の告別式に列せられたときの先生の御姿に、何かしら憂愁のお気持ちを感じとったのは私のみではあるまい。小島先生をして「〇〇君がまた先に逝った」と嘆かしたものは、一つには先生の長寿によるものであるが、その長寿は、まったく健康にたいする細心の御注意によるものであった。先生は生来、むしろ蒲柳の質と承っていたのであるが、その先生が九十年の人生を生きられ、学界に優れた大業を成しとげられたということは、後に続くものにとって、この上なき刺戟であり生きた教訓になるだろう。

先生の恩恵に浴するものは、学界に生きるもののみではない。先生の演習に参加したものは、みな教師と学生との関係を乗り超えて、家族的な人間関係を創り出し、知らぬ間に小島先生の性格そのものを身につけるようになった。開放的で物事にこだわらず、社会に出ても人から好感を持たれ、このことがその人生にとって大きなプラスになったのである。

いま、小島先生の御逝去に直面し、悲しみの中にも私は、先生が大学人としてもっとも幸福な時代を生きられたという、せめてもの慰めを禁じえないのである。先生ご自身も、屢々自分の京大生活が、その歴史を通じてもっとも幸福な時代だったと、述懐されていたが、事実当時は、学問研究上の悩みや苦しみはあっても希望のある苦しみであり、社会的な悩みはなかったのである。ところがこんちのように、価値観が極度に分裂してくると、大学人はそこから起る秩序の破壊と闘わねばならず、静かに象牙の塔に閉じ籠って、専門分野の研究に沈潜しているわけにはゆかなくなる。それだけ大学人の負担は増し、新たな苦悩を背負わねばなくなるのである。このことは、独り社会科学の分野のみならず、大なり小なり人文科学や自然科学の分野にも現われるものであって、それぞれの研究を阻害することにもなりかねないが、またこうした苦悩の体験から、新しい学問体系を築き上げるヒントを把みとることもできるだろう。

京都大学経済学部は、その前身たる法科大学時代より優れた経済学者を輩出したが、創立当初、学部の基礎を築かれた先生方のうち、生存される先生方の最後の一人になられたのが、恐らく小島昌太郎先生だったであろう。その小島先生が御逝去になって、京大経済学部は完全に二世の時代に入ったのである。学部創立いらい六十年の歴史は波瀾変革の歴史であったが、経済学部の諸先生方はよく時代を洞察せられ、また時には時代

を先取りせられて、新しい学風を樹立し、孜孜として研学の道を歩んでいられるのである。その成果はまことに瞠目すべきものがあるが、このことは先生方自身の努力研鑽によるとはいえ、先輩先生方の築かれた学問的基礎がなくては、容易になし得なかったところではなからうか。小島先生の御逝去に会い、改めて先生への尊敬と感謝を禁じえないのである。